

小さな群れ

カトリック美唄教会

2024年 4月 No.323

2024年3月31日発行

Fr. Narciso Cavazzola ofm

イエス・キリストの復活を祝う理由

3月20日は春分で、本州では桜が咲いています。北海道は一月遅れているような気がします。少しずつ、積もった雪も解けてきますが、いつ春の色になり小鳥の鳴き声が聞こえてくるのでしょうか。

2月14日に四旬節が始まってから、毎日イエスがエルサレムへの歩いた道を私達も共に歩んできました。24日からは、聖週間でイエスの愛、犠牲、栄光を思い出させてくれます。

毎年、4月ごろ、世界中のクリスチャンは、イエスの復活を祝います。大きな喜びの時期です。

イエスの復活は、キリスト教の中心的メッセージです。

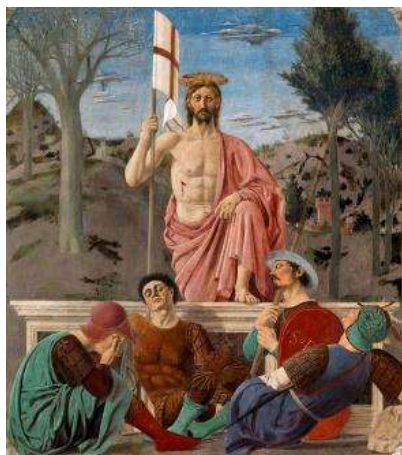
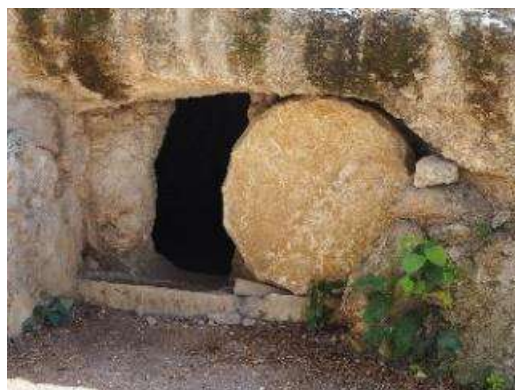
使徒パウロが書いた通り、イエスがよみがえられなかったのなら、我々の信仰は空しいのです。

ですから、クリスチャンはイエスの復活を祝う時、我々の信仰の土台も祝います。我々の信仰のすべてはイエスが十字架上で死なれたこと、また死者の中からよみがえられたことにかかっているのです。

なぜ私たちは、イエスが本当によみがえられたの信じるのかと、ある人は思うかもしれませんが、もっと重要な質問はこれです：「なぜ復活が大切なのか」ということ。

すべての宗教は、同じだと思えないですが、しかし、他のすべての宗教と違って、なぜイエス様の復活はそんなに特別なのでしょうか。

4月の毎週日曜日の聖書朗読で、この質問に答えています。イエスの復活は歴史的な出来事で、証拠は十分にあるのです。しかし、何よりも、イエスは本当に死者の中からよみがえられたのだからこそ、イエスの復活は私たちに揺るぎない心の平安を与え、私たちの生活と心、またこの世全体を変革させる力があるのです。



2024年4月 主日ミサ・平日のミサ予定

主任司祭 ナルチゾ神父

美唄教会 小さな群れ
2024年 4月 No.323
2024年 3月31日発行

・朝の祈り 家族のための祈り

日	曜	ミサ		各種勉強会	会議・その他事項
		主日・祭日	時間		
5	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
7	日	復活節第2主日 神のいつくしみの主日	午前 11:00		
12	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
14	日	復活節第3主日	午前 11:00		運営委員会 会計監査
17	水		午後 6:00	ロザリオの祈り	
19	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
21	日	復活節第4主日	午前 11:00		
26	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
28	日	復活節第5主日	午前 11:00		第13回定期総会

《 平日のミサ 》 金曜日のみ 午前 10:30 5. 12. 19. 26 日です
《 聖書に親しむ 》 平日のミサ後、旧約聖書に親しんでみませんか。

霊名の祝日（敬省略）	清掃当番	花当番
16日 ベルナデッタ 大城繁子・佐藤順子	第2週 中村 第4週 河野	大城

【お知らせ】

- ◎ 4/28（日）第13回カトリック美唄教会定例総会を行います。
- ◎ 能登半島地震献金 ￥33,000 を送金しました。

【幼稚園】

- ◎ 4/10日（火）入園式

真夜中の牙研をり大氷柱

子供の頃には、どの家の屋根からも大きな氷柱が一面に垂れ下がっていて、ただ無意味に折って歩いたり、ちゃんばらの真似事をしたり、かじりながら歩いたりしたものである。大人にとっては無意味なようなことでも子供にとっては面白くてたまらないのである。例えば、寒い朝に毛糸の手袋で氷柱を掴んでいると、氷り付いて、手を開いても氷柱が落ちなくなる。それがまた面白いといつて皆でやりながら学校へ行くのである。着ている服はろくな物でなく、寒さは沁みるが、学校へ着く頃には頭から湯気が立つ程身体が温まっているのである。

今の子供の一部には、ポケットに手を入れ、寒そうに体をすぼめ、まだ覚醒しきっていないような面差しで、暑さも寒さも全く感じないような無表情で歩いている姿は、ゾンビとまでは言わないが、まるで夢遊病者のように見える。「おい、元氣出せ」と言っただけでやめなくなる。きつとその子には、節搦られて朝日に照り輝く氷柱の目映(まばゆ)さも、降ったばかりの雪のそれこそ洗われるような白さも目には入らないのであろう。

稀に、夕方薄暗くなり、凍れてきても雪の中で、それこそ元気に遊んでいる子供を見ることがある。「ゲームなんかするな。勉強もい。遊べ」と、ついお節介にも言ってみたくなるのは年寄りの悪い癖であらうか。

古人斯く仰ぎたらむや冬入日

今すんでいるここ共練の、もう少し街の近く辺りは、昔屯田兵が入植した所である。

家を建てた所は、当時市が田んぼを買い、区画割りをして目印にコンクリの杭を建てただけの所であった。周りには数軒しか無く、まるで田んぼの中に家を建てたようなものであった。

しかし考えてみると、この田んぼの辺りは随分前から開墾され、作る人も代々入れ替わり、土地も売られ、また買われして、それこそ幾人もの血と汗と涙とがこの土に沁み込んでいるのを感じるのである。

積み上げた雪の山に立って、西の原野のほうを茜に染めながら沈んでいく夕日を眺めていると、古人も故有ってこの地に住み付き、こうして雪を掻き、腰に手を当てて背筋を伸ばし、今沈まんとしているこの夕日をしょぼつく眼で眺めていたことであらう。そうして歳をとり死んでいったことを想うのである。

やがて自分も、古人となるのである。

芹ひとつ離れて郷のほろ苦し

育ったのは今の札幌の隣り、北広島市である。当時は広島村で、人口は定かではないが二、三千人だったかと思う。駅から役場辺りにかけて店が十数件の小さな村であった。

石川啄木の「石をもて追はるるごとくふるさとを出でしかなしみ消ゆる時なし」ではないが、札幌の高校を出てすぐ東京に就職し、その後戻って数ヶ月ほど友達の所に厄介になったことはあるが、美唄に来てからはクラス会程度の関わりである。

去る年の夏、妹が孫二人を連れて来たのでルーツの旅と称して一緒に回ったことがある。住んでいた土地はすっかり変わっていた。草茫々の少し中に入った辺りに大きな車庫があり、壊れたような車が数台止まっているだけの、まるで廃墟の感であった。近所に在る家も数軒が面影を留めるだけで、知り人は一人としていなくなった。学校にも教会にも回って見た。中学校では当時の面影を見出すことはできなかった。駅から原野、つまり家に向かうあの巨大で急な坂道もなだらかになり、ただ

の坂道でしかなくなっていた。

街から原野に向かって崖になっている所の防空壕の跡やは昔随分探検して歩いたところである。鉄兜や飯ごうやらが転がっていたり、火を焚いた跡が在ったりと、退屈するとは無かった。祠のような所が在り、そこに真つ白い蛇が番人のように鎌首をもたげていたのを見たことも在った。

芹や三葉を採りながら歩いたその崖下の薄暗い林床も、もう面影すらなかった。その辺りから少し原野に向かった所に「東公園」という名前の公園があり、大きな開拓の碑が建っていた。親父や、近所に開墾に入った人々の名前が彫ってあり、懐かしくなぞった。嬉しいことである。

《蜻蛉飛ぶ開拓の碑に親爺の名》

あの芹を摘んだ頃からもう六十年以上経ったのである。まさに浦島太郎状態であることは否めない。が、しかし本当は、知っている誰かに出会い、「おお、よく来たな」と言っ貰いたいのかもしれない。記憶を呼び覚ます懐かしいものも多少は在るのだから。

令和六年三月

吉村道雄